

生産者通信

NPO法人
米ニケーションセンター
定価 100円(送料込)

基本通りの中干しは必要？不必要？ 最高分けつ期の稲を比較

6月の末から7月のはじめの最高分けつ期を迎えた稲は最も勢いを増し、濃緑色の元気な姿を見せてくれています。春先からの苦勞が一気に報われたような気がしてホツとしています。

隣の水田と分けつ期の多さを競うのはまったく無意味なことだと充分に判つてはいるのですが田植えが遅く植え付け本数も少ないと、これまでの期間の稲姿がなんと寂しげに見えてしまふのは私自身が人間として未熟であり、弱いからなのでしょう。

しかし、5月末のガス抜きでしっかりと根を伸ばした稲が入水と同時に大変身をしてくれました。一気に分けつ数を増やし、しかも太く扇型に開いた期待通りの稲姿になっています。

残念ながら、ガス抜き後に充分に水を張れなかつた田は茎がやや細く、茎数も少ない状態です。水の力を改めて実感します。

写真A・B共に6月末の



写真A

コシヒカリです。Bは近所の方のもので、田植えが4〜5日早く坪60株植えですが、基本通りに中干しに入っています。茎数は数えていませんが40本位にはなっています。株の中はムレムレ状態です。中干しをやっても分けつは止まらず、やがて弱小分けつは枯死して20本前後に落ち着くでしょう。しかし、残った茎は細く、太陽の光を求めて伸び上がり、第4・第5節間が長くなって倒伏しやすくなり、充分な穂肥をやる事ができなくて小さな穂しかつけないとができません。それでも天候さえ良ければ登熟歩合が上がって540kgは採れるでしょう。



写真B

Aは落水途中の我が家の一発施肥の慣行コシヒカリです。坪47株ですが、1株20本を越えはじめられています。植え付け本数が2本前後、浮き苗にならない程度浅植えをしていきます。その効果だと思われませんがすでにしつかりと開帳し、力強く根を張っています。溝切りをおこない、田の表面を固くした後は出来るだけ遅くまで飽和状態を続けるだけです。

心配なのは水です。今年は何処の水源ダムもほとんど空っぽで、的確な水管理をやりたくともできず、丁度良く雨が降ってくれるのを待つ他なさそうです。

写真Cは、落水途中のJA S有機の稲です。1株1



写真C

2本植えて抑草のため深水(8〜10cm)にしてみました。後になりまして。落水後に24〜25本まで分けつすることを期待しています。

昨年からのトンボの羽化は6月13日から始まりましてが、今年は遅れて17日から始まり、羽化数は昨年の30%位と少なめでした。羽化が遅れた原因も羽化数が少なかつた原因も判りません。問題は昨年まではまつたくといってよいほど草がでなかつた(10a当たり10本位のコナギとホタルイ)2の水田にもこなぎがポツポツと発生したことです。

2水田には発生しませんでした。1と3の

水田は田植え4〜5日後にヒエがびっしり生えましたが、米ぬかペレットの散布と深水でほぼ消滅してしまいました。

しかし、部分的とはいふもののコナギの方がかなりびっしりの状態になってしまいました。1〜2葉期の早い時期に除草機あるいはチェーンを引いてやれば有効な対応ができると思いましたが、その時には都合で作業ができなかつたことと、落水後に手取りするつもりで放置したため、落水後には水面まで葉を伸ばしてしまいました。2連の除草機を押してコナギを浮かせてみましたが、労力の割には効果的とは言えない結果でした。

やはり除草の極意は「草を見ずして草をとる」以外になさそうです。コナギが発芽したばかりで根を伸ばさない内に鎖を引いてやれば稲には負担をかけず、楽に効果的な除草が可能です。今年も冬仕事に鎖すだれの除草器具を自作しようと思っているところです。

《内山常蔵記》

2009年6月22日 商経アドバイスより

21年度 新規需要米の見通し

目標にはほど遠い作付け

米粉・飼料用 1万数千ヘクタール規模か

「水田フル活用」を掲げて各種助成措置も講じて取り組まれている21年度新規需要米(米粉・飼料用米)だが、作付面積は20年度の実績に対して1〜2割程度の1万数千ヘクタールにとどまる見通しが強まっている。

農水省では、20年度における新規需要米の作付実績(昨年7月中旬で1万1558ヘクタール)が維持されていることを前提に21年度本予算・補正予算に盛り込んだ助成処置によって、地域協議会を通じて取組面積の上乗せへ向けた推進活動の詰めの段階に差し掛かっている。

補正予算の成立時期までに生産現場では21年度米の作付けが進行していることから、実際には主食用米の過剰作付面積の中から新規需要米への振り替えが進められている形になる。20年度産の場合、過剰作付面積は5万4000ヘクタールに及んでおり、この中から新規需要米に差し替えていくイメージになる。

21年度からの水田フル活用支援策では、本予算の「水田等有効活用促進対策」によって新規の米粉・飼料用米生産に対し10〜5万5000円(麦・大豆・飼料作物の場合3万5000円)を交付。補正予算の「需要即応型生産流通体制緊急整備事業」により、さらに米粉・飼料用米生産に10〜2万5000円(麦・大豆は1万5000円)を上乗せし交付する助成金を講じる。

これら上乗せ後の助成額水準は、要件の満たし具合にもよるが、仕組み上は10〜8万円に届く。加えて、新規需要米に取り組む生産者・流通業者・メーカーなどで作成する生産製造連携事業計画(連携計画)の策定を要件として、都道府県・市町村が作成する「活性化計画」を認定する21年度「農山漁村活性化プロジェクト支援交付金」では、米粉製造設備の整備などに對して事業費2分の1の設備助成も実施する。

「水田フル活用」を掲げて各種助成措置も講じて取り組まれている21年度新規需要米(米粉・飼料用米)だが、作付面積は20年度の実績に対して1〜2割程度の1万数千ヘクタールにとどまる見通しが強まっている。

今月29日(月)までに活性化計画の第2次募集を受付中だ。ただし、21年度産の新規需要米の作付面積が1万数千ヘクタール(10万トンの弱)の規模にとどまるとすれば、農水省が打ち出した10年後の食糧自給率イメージにおける米粉の生産量50万トン(19年度産1万トンの弱)を食糧自給率26万トン(1万トンの弱)には程遠い水準だ。

実需者まで含んだ関係者まで策定しなければならぬ連携計画の負担や、新規需要米の生産計画が判明する7月以降に講じられる農水省のマッチング対策(実需者への結び付け)の不安などが足かせになっているとみられる。このため卸業界では「過剰作付面積5万4000ヘクタールのうち1万数千ヘクタールが減反力ユニット対象の新規需要米に切り替わっても、20万トン以上の生産過剰が生じる」という観測につながっている。

「水田フル活用」を掲げて各種助成措置も講じて取り組まれている21年度新規需要米(米粉・飼料用米)だが、作付面積は20年度の実績に対して1〜2割程度の1万数千ヘクタールにとどまる見通しが強まっている。

秋田の酒造30社、酒米を地元農協から調達

コスト1割削減

日本経済新聞より

秋田県酒造組合(伊藤辰郎会長)に加盟する酒造会社30社は、日本酒の原料米の調達方法を見直す。従来は全量を全国農業協同組合連合会(全農)など集荷業者から仕入れていたが、一部を地元の農協から直接調達する。3月に実施された加工用米の制度改正を利用して全国初の試みで、コストは1割程度削減できるとみている。日本酒の消費不振は深刻で、酒造各社は生き残りをかけてコスト削減や消費喚起に知恵を絞っている。30社は昨年、全農から普通酒に使う加工用米4500トンを60キログラム当たり1万6000円で購入した。今年は地元の新たな農業協同組合(秋田市、JA新あきた)から2500トンを同9500円前後で購入する。7月に正式に契約する。

売れる米づくり技術情報(新潟なんかん米改良協会)より

出穂期は平年並み! 早生の穂肥は遅れずに!

1 生育状況 (21年6月25日現在) 平年並みからやや早い

品種	場所	移植	草丈(cm)			茎数(本/m ²)			葉数(葉)			草丈(cm)		
			本年値	前年値	目標値	本年値	前年値	目標値	本年値	前年値	目標値	本年値	前年値	目標値
コシヒカリ	平坦地	5/11	42.5	35.1	46.0	495	429	490	8.7	8.0	9.4	41.7	37.5	39.0
	中山間	5/11	43.8	39.0		427	379		9.1	8.0		42.2	38.7	
こしいぶき	平坦地	5/6	44.5	39.0	45.0	650	490	570	8.8	8.8	9.9	40.5	44.8	40.0

2 穂肥の施用前には、必ず幼穂を確認しましょう

幼穂長による出穂前日数のめやす

幼穂長(cm)	0.02	0.1	0.02	0.13	0.5~1.0	4.0~6.0
出穂前日数(日)	30	24	23	20	18	12

3 カメムシ対策(草刈)を徹底しましょう

発生時期: 平年並~やや早、発生量: やや多
各地域の病害虫調査でも畦畔・農道等の雑草が繁茂し大きいところでは、カメムシが確認されています。雑草が結実しない間隔で草刈りを徹底しましょう。

圃場内の平均的な株から最も長い茎を抜き取り計測。数株から採取し総合的に判断する